

ベトナム系ニューカマーのトランスナショナルな実践

清水睦美*

Transnationalism and the Vietnamese Second-Generation in Japan

Shimizu Mutsumi

1. 問題設定

本研究は、ベトナム系ニューカマーの中でも、日本で第二世代となる若者に焦点をあて、かれらのトランスナショナルな実践を明らかにすることを目的としている。アメリカの古典的同化理論によれば、親世代は、エスニックごとに、渡日経緯、人的資本、編入様式、家族構造に大きく違いが見られるものの、こうした差異は主流社会への移行に伴い消失し、第二世代はホスト社会に同化していくと考えられてきている (Gordon 1964)。しかしながら、移民の多様化が進むにつれて古典的同化理論は裏切られ、分節的同化理論やトランスナショナリズム研究の視角から、親世代の差異や母国社会とのつながりが、第二世代の地位達成や文化変容に影響を及ぼすことが指摘されるようになってきている。特に、トランスナショナリズム研究が明らかにしてきたのは、母国とホスト国に跨がるトランスナショナルな社会空間が形成され、そこから得られる資源を利用しながらホスト社会へ適応していく移民の姿である。トランスナショナルな社会空間は、母国とホスト国の間で人的、社会的、経済的、文化的やりとりを可能にするトランスナショナルな実践を促してきたのである (Levitt 2002, Levitt 2009)。

問題は、ホスト社会における移民の世代交代に伴い、トランスナショナルな社会空間が維持されるかどうかという点である。この点に関して、北米の移民研究は2つの立場に分かれている。ひとつは、時間経過にともない、トランスナショナルな実践を

支える母国との情緒的絆は徐々に消失していくという立場であり、もう一つは、逆に母国親族とのトランスナショナルな紐帯は世代を超えて継承されていくという立場である。トランスナショナルな社会空間の維持には、ホスト国と移民の出身国の両方の政治経済状況が影響するだけでなく、両国の関係も影響するために、移民政策をもたない日本社会と北米ではホスト国の状況が異なるだけでなく、移民の出身国とホスト国との関係の変化も北米とは異なる。したがって、日本のニューカマーを対象とするにあたっては日本の文脈に合わせた検討が必要となる。

以上を踏まえて、本研究では、子世代の生活世界がトランスナショナルな社会空間へと拡張されている可能性に注意を払いつつ、どのようなトランスナショナル実践が行われているかを明らかにしたいと考える。そこで、以下の3つのリサーチクエスチョンを設定し調査研究を行った。

- (1) 親世代 (第一世代) は、どのようなトランスナショナルな社会空間を築き上げているのか。
- (2) 子世代 (第二世代) は、どのようなトランスナショナル実践を行っているのか。
- (3) トランスナショナルな実践の消失・維持・構築には、どのような要因が影響しているのか。

加えて、分析にあたっては、次の点を考慮した。世代を超えて継承されるトランスナショナルな実践は、これまでおもに母国訪問や送金頻度といった「客観的行為」としてのトランスナショナリズムに

* 日本女子大学教育学科教授

注意が払われてきたが、母国への愛着や帰属意識といった「主観的態度」としてのトランスナショナリズムにも目を向ける必要が指摘されている（Rumbaut 2002）。そこで、本研究では、まず、客観的行為と主観的態度の関係の種々の有り様を多角的に把握しながら、第二世代のトランスナショナルな実践の類型化を試みることにする。続いて、親世代の人的資本や家族構成、編入様式が、どのように第二世代のトランスナショナル実践の消失・維持・構築に影響を及ぼしているかを検討することとする。

2. 研究の対象と方法

本研究で用いるデータは、日本で義務教育経験をもつベトナムにルーツをもつ若者 19 名を対象に行ったインタビュー調査である。調査対象者 19 名中 18 名の親がインドシナ難民やその家族として日本定住した者である。1 名は日本に定住するベトナム人の紹介により日本人と再婚した母親の連れ子であるが、渡日後間もなくの日本人の父親の死別、その後の準拠集団は在日のベトナム難民である様子から本調査の対象者とした。調査対象は、学齢期に来日したいわゆる 1.5 世も含まれているが、本研究では両者を第二世代（子世代）と捉えている。対象者に対しては、半構造化インタビューを行い、許可を得て録音したものをスクリプトに起こしている。インタビュー対象者のプロフィールは巻末に掲載した。

3. ベトナム系ニューカマーの概観

2015 年末の在留外国人統計によると、ベトナム国籍者総数は 146,956 人で、前年比プラス 47.2%と、図 1 に示したようにここ数年で急増しており、今や日本に中長期在留する外国人グループでは第 5 位となっている。こうした背景には、「留学」や「技能実習」⁽¹⁾ という在留資格による滞在者の急増がある。表 1 は、2011 年と 2015 年のベトナム国籍の在留外国人数を比較したもので、これとみると「技能実習」「留学」による在留の増加は一目瞭然である。ただし、本調査対象者は、現在急増する「技能実習」「留学」によるベトナム人とは異なり、親世代が「難民」として入国し、「定住」「永住」という在留資格のもとで長期滞在をしてきたベトナム人であ

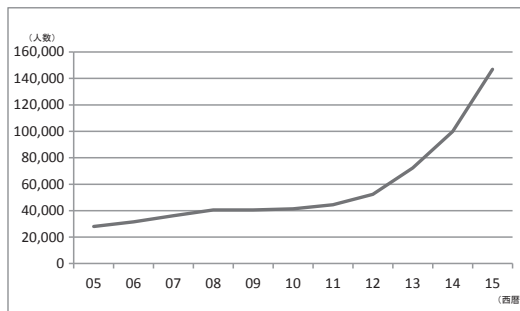


図 1 在留ベトナム人数の推移

表 1 在留資格別の在留人数

	2011 年	2015 年	増加率(倍)
技能実習	13,524	57,581	4.3
留学	5,767	49,809	8.6
永住者	10,361	13,539	1.3
技術・人文知識・国際業務	3,021	8,784	2.9
家族滞在	1,859	5,365	2.9
定住者	5,726	5,346	0.9
日本人の配偶者等	1,778	2,182	1.2
永住者の配偶者等	848	1,429	1.7
特定活動	378	1,254	3.3
企業内転勤	343	656	1.9
宗教	157	217	1.4
研修	258	197	0.8
教授	117	152	1.3

る。

インドシナ難民の発生は、ベトナム戦争の終結（1975 年 4 月 30 日）を契機とするが、日本では 1978 年に 3 人の定住が認められたことに始まるという（萩原 2013）。ただし、その間に、二千人近いボートピープルが日本に漂着しているにもかかわらず、である。この数字に象徴されるように、インドシナ難民受け入れの日本政府の姿勢は極めて消極的であったとされる（田中 1994、萩原 2013）。外務省によって公表されているインドシナ難民の日本の受け入れ総数は 11,319 人⁽²⁾であり、約 144 万人⁽³⁾のとされる世界レベルのベトナム難民総数の 1%に満たないことから、その消極性がうかがわれる。加えて、インドシナ難民の定住化に向けた政府の援助は、1979 年 11 月の難民事業本部の発足でようやく始まり、同年 12 月に姫路定住促進センター、1980 年 2 月に大和定住促進センター、82 年に長崎の大村難民一時レセプションセンター、83 年に品川国際救援センターが開設されるのを待たなければ

ならなかったという⁽⁴⁾。本調査対象者の親世代は、姫路、大和、大村、品川のいずれかのセンターを経由して、日本に定住した者たちである。

なお、インドシナ難民は、ベトナム以外に、カンボジア、ラオスからの出国者もある。その内訳は、ベトナム人8,656人(76%)、カンボジア人1,357人(12%)、ラオス人1,306人(12%)であり⁽⁵⁾、ベトナム難民はインドシナ難民の中で最も大きなグループである。

4. 「難民」としての親世代のトランスナショナルな実践

本調査対象者のベトナム系ニューカマーの親世代は、19名中18名が難民もしくは難民の家族として日本に移動してきており、1名だけが、インドシナ難民として日本に定住する親戚の紹介で、母親が日本人と再婚したことによる移動であった。親世代は、ベトナムで既に結婚している者は、父親がボートピープルとして出国した後に日本に定住し、そこで家族を呼び寄せている。また、単身でボートピープルになった者は、日本に定住した後にベトナム難民どうし、日本で結婚している。さらには、ベトナムで既婚であっても、日本で出会ったパートナーと再婚している者もある。いずれにしても、ベトナム難民に共有される経験として「ボートピープル」があるわけだが、このような来日経緯は子世代にも共有されている。

ベトナムの南部に居たので、将来がないっていうことで、母のお父さんが漁師で漁船を持っていたので、それで出ようかっていうことで、出たみたいです。

(2016年1月31日 インタビュー：V14)

しかしながら、移動の困難さや過酷さゆえに、あるいは、ベトナムからの合法的ではない出国ゆえに、移動に関わる詳細な内容を、親世代は子世代に話すことを減らすことが多いようであり、親世代の移動の全貌を子世代が理解しているかと言えば、そうではない様子もうかがえる。

V12 ママに関しては聞いたことがあって、おじいちゃんが持っていた船に何人か乗って、漂流し

て、そのときに日本の船に拾われて。でもそのとき拾われたけど、輸入物を届けている最中だったので、ポルトガルかどこかに1回滞在して、そのあと日本に連れ戻されて、赤十字にお世話になったっていうのは聞いています。

父に関しては、思い出したくないのか、「覚えていない」とか言って。でも、とりあえず、「船でけがをして、足の爪がはがれた」みたいなことは言っていました。

— なるほどなるほど。で、2人はどこで会っているんですかね。

V12 それが分からないんですよ。

— そうなんだ。日本で会っているけど、どこで…。

V12 日本で会っているけど、赤十字で会ったのか、それとも難民がいっぱい集っている所でたまたま知り合ったのかを聞いていなくて。「どこで会ったの？」って言うても、はぐらかされるんですね。

(2015年7月7日 インタビュー：V12)

ただし、こうした話を語る親世代を、子世代は、基本的につらさゆえのことであると理解しており、親世代の苦労に対して一定の理解を示しており、日本への移動に関して多くが肯定的である。

このように移動してきた難民としての親世代であるが、親世代出国後のベトナムは、ドイモイ政策(1986年)によって経済が自由化されていく方向へ転換していく。1987年5月にはベトナム政府によって、海外にいるベトナム人の一時帰国が許可され、これにより、ベトナムへの親族訪問や送金が行われるように変化していく。難民として来日したベトナム人の最初の一時帰国は、1987年9月の9人であったとされるが(戸田2001)、その後、多くの者がベトナムへ親族訪問を行うように変化していった⁽⁶⁾。しかしながら、他方で、ベトナム経済は、ドイモイ政策後、アジア諸国のなかでも中国と並んで好調で、親世代は自身の親の生存中は送金を継続するも、きょうだいやその家族に送金をする理由は次第に薄れるという関係に変化してきたのである。こうした関係の中で、ベトナムへの親族訪問も減る傾向にある。ゆえに、難民として移動したベトナム難民の親世代のトランスナショナルな実践は、定住初期から現在に至る時間的経過の中で、逡減という変化を見せてきているのである。特に「送金」に見られ

るような日本とベトナムの経済的格差を背景とする実践は、顕著に減っているのである。

他方、ベトナム難民の日本での生活は、日本語の問題に始まり、就職・就業の問題など生活のしづらさを一貫して経験してきていると指摘されており（荻野 2013）、必ずしも豊かとは言えない。しかし、難民として先に欧米へ移動した人々の社会的上昇移動を見聞きする中で、日本での生活の豊かさや安定を求め、かつ、日本への定住を確認するために、持ち家という資産を手にするために住宅ローンを組む者も現れ始めている。

これらの状況を総括すると、ベトナム難民の親世代のトランスナショナルな実践は逡巡してきており、アメリカの古典的同化理論を立証する過程が進行していると言えよう。ただし、こうした過程は、ポルテスらの親子の文化変容モデルをもとに考察すれば（Portes and Rumbaut 2001, p.52）、それは親子ともに主流社会への統合を目指す「協和的文化変容」ではなく、どちらかと言えば、家族の絆が崩壊し、子ども達はエスニック・コミュニティを避けるような「不協和的文化変容」の側面が強い。特に、冒頭で述べたように、「難民」としての日本社会での受け入れは、政策的にも消極的であったと言わざるを得ず、日本への適応は、個々人のもつ人的資本や家族構造に大きく左右されている。加えて、さらなる親世代の困難は、ベトナム戦争のもとで、学歴や言語も十分に獲得できたとは言いがたく、さらに、仕事の経歴も、小規模の農業や漁業、小売業が中心で、日本での適応を手助けできる資源にはなりにくいものとなっている。

このような状況化で、親世代が日本での適応を助ける資源は、家族構造に限られることになる。そのため、親世代のトランスナショナルな実践には、家族構造を基盤とする2つの特徴が確認できる。

一つは、子世代の結婚のパートナー選択において、ベトナム人との結婚を希望し、そのパートナーをベトナムから呼び寄せることを望むという傾向が圧倒的であるということである。本調査でも19人中16人、親はベトナム人との結婚を望んで（る）たと述べている。この親世代の願いを子世代が考慮するかどうか、子世代のトランスナショナルな実践の分岐の一つとなる。この点は、次節で詳細に検討する。

もう一つは、日本社会への適応に困難さがうかがわれる家族は、経済成長するベトナムの近親者との間で、日越にまたがって違法性が疑われる商売を行う様子もあるという点である。例えば、偽装結婚による現金獲得もその一つである。これは、永住ビザを獲得した在日ベトナム人の配偶者として、来日を希望するベトナム人に「永住者の配偶者等」のビザによる入国を斡旋するもので、来日したパートナーが「定住」ビザを獲得したところで離婚という手続きをとる。ただし、婚姻関係があるうちは基本的に同居の形態をとっており、それが偽装であるかどうかも確認はないというのが一般的である。こうした営みを、子世代も基本的には知っており、そうした実践に荷担する場合もあれば、そうした実践を嫌う場合もある。本調査でも2名の親族に、そのような可能性が疑われる結果となったが、例えば、V19は、インタビューの後に、この問題に調査者が触れた時には、次のように答えている。

私は良くないことだとわかっているから絶対にしないけど、親たちは、ベトナムの困った人たちを助けているから、いいことしているみたいに思っている。そこは、違うなって思う。
(2016年8月26日 インタビュー後のフィールドノート：V19)

このようなトランスナショナルな実践は、詳細な情報を得ることは困難であるが、今後継続的に情報を集めつつ、論じる機会をあらためて検討することとする。

5. 子世代はどのようなトランスナショナルな実践を行っているのか

では、前述のような「不協和的文化変容」を基調とする親子関係のもとで、子世代はどのようなトランスナショナルな実践を展開することになるのだろうか。

まず、親世代が積極的に行っていた送金は、インタビュー対象者全員が「していない」と答えている。また、ベトナムの親族との連絡も自らが始動して積極的に行われることはない。例えば、V13は次のように話す。

V13 基本的に親戚や家族とか、みんなでViber（バイバー）のグループでつながっていて、常にみんなでLINE（ライン）みたいな感じでやりとりをしている感じ。

— じゃあ、そのときはベトナム語？

V13 ベトナム語です。でも、私は、そこに加わるというよりも、常に読んでおしまいって感じなので。お母さんとそのきょうだいとかが一緒にやっている感じなので。

— じゃあ、見ようと思えば、いつでも見られて。

V13 そうですね。私は、何か鳴ったなって、読んで終わりみたいな感じで。

— なるほど。それは読めるのね。

V13 読めるけど、全部が分かるわけではないという感じ。分からない言葉もあります。

— なるほどね。じゃあ、ほとんど自分から発信することは・・・。

V13 ほとんどないですね。誰かの誕生日とかぐらいで。

(2015年7月27日 インタビュー：V13)

このように、子世代のベトナム親族とのつながりは、親の家で偶然とった電話がベトナムからのものであることや、親の家ではベトナムとSkypeでつながっているため少しコミュニケーションをとることがある、あるいは、ベトナムに住む親戚等とSNSでつながっているため連絡が入れば返信することはあるという程度のもので、決して強いとは言えない状況にある。

続いて、ベトナム訪問であるが、ドイモイ政策以後のベトナム経済の自由化に伴い、親世代の親族訪問は活発に行われるようになるが、それが第二世代

までには引き継がれていかない。頻繁にベトナムを訪れると回答する子世代も、それは親の同行によるものであり、それに深い意味づけがされるわけではない。

V5 4年に1回ぐらいですかね。大体周期がそれぐらいですか。

— 2週間ぐらいはいる。

V5 2週間だったり、1週間だったり。

— これは、親が4年に1回、必ず行くっていうこと？

V5 そうですね。

— 親は結構頻繁に行くけど、何かあって行くの？

V5 いや。ただの、あれじゃないですか。両親に会いに行ったりとか。

— じゃあ、比較的、お父さん・おかあさんはベトナムに行く感じなんだね。

V5 そうですね。

— 母国のイメージ、ベトナムのイメージって、V5にとってはいい感じ。いいところだなあっていう感じ。あんまり好きじゃないなあっていう感じ。

V5 俺的には好きじゃないです。

— これは、かなり好きじゃないの？

V5 あまりですね。

(2014年7月26日 インタビュー：V5)

このように難民として移動してきた親世代のトランスナショナルな実践は、基本的に子世代に引き継がれていない。しかし、そうした傾向がありつつも、そこには第二世代独自のトランスナショナルな実践を捉えることが可能であった。そこで、本研究では、かれらのトランスナショナル実践を、二国間

表2 第二世代のトランスナショナル実践のパターン

類型	トランスナショナルな社会空間の方向性		パートナー選択	母国訪問の頻度	アイデンティティ	該当者	数
ホスト社会志向型	消失	日本への同化	日本人	逡減（親への同行）	日本人（ルーツの隠蔽傾向）	V3,V4,V11,V12,V13,V16,V17	7名
二国間志向型	維持	ベトナムと日本	ベトナム人(呼び寄せ)	維持（愛着的）	ベトナム人	V6,V7,V8,V9,V18	5名
多文化社会志向型	構築	ベトナム的要素の取り込み	在日ベトナム人 在日外国人、日本人（多文化積極的肯定派）	維持（構築的）	ベトナム人（創造的）	V1,V5,V14,V15,V19	5名
葛藤型	葛藤	日本への同化に抗うベトナム的要素の維持	既婚：日本人 未婚：ベトナム人の可能性大	維持（同化への抵抗）	日本人（ルーツを否定はしない）	V2,,V10,	2名

にまたがる社会空間のありように着目して、表2に示すように、消失、維持、構築、葛藤の4観点で分類した。以下では、それぞれのパターンを検討していくこととする。

(1) ホスト社会志向型：トランスナショナルな社会空間の消失

(7名：V3・V4・V11・V12・V13・V16・V17)

第一は、トランスナショナルな実践を親世代から受け継がずに消失させ、日本に同化していく傾向が強いパターンである。先に述べたように、「難民」として日本に定住することになった親世代は日本の消極的受け入れ施策ゆえに、日本社会での適応に一定の困難さが伴っており、それゆえ子世代との関係は「不協和的文化変容」の傾向が強い。こうした場合、ポルテスら（Portes and Rumbaut 2001）によって、「役割逆転（role reversal）」が生じるとされ、それは、子ども達の文化変容がかれらの親たちよりもはるかに先に進んだために、家族にとって重要な判断を下す際に、子ども達もっている情報を親たちが頼るようになるためであると説明されている。ポルテスらによれば、アメリカにおいて役割逆転は、20世紀初頭のヨーロッパ系移民の労働者階級の親子間でも見られたものであるが、その場合、子世代は上昇移動を果たしていったのに対し、今日のラテン系やアジア系の移民の第二世代の場合には、下降同化の可能性を示す危険信号となっているという（pp.51-53）。

本調査対象者においても、トランスナショナルな実践を消失させて、ホスト国志向を強めていく者たちは7名おり、分類の数としては最も多くなった。その中で、下降同化の可能性が高く認められたのは2名（V3・V17、ともに男性）、現状維持と推定できたものが3名（V11・V12・V13、ともに女性）、上昇移動傾向が2名（V4・V16）であった。下降同化が認められたV3は、「2人（両親）ともあんまり会いたくない」「居場所がない」とも語り、「一時的に、死のうかかっていうのは何回かはあったし、どうやったら一番簡単に死ぬるかっていう考えが多かったですかね」とも語る。V3は、小中学校の時に「とてもいじめられた」と話し、学校の先生も「全く好きではない」と話す。既に、清水・チューブ（2015）で明らかにしているように、義務教育経

験の良し悪しと転職志向には相関が見られるが、V3もその事例にあてはまり、転職は10回を数える。他方、上昇移動としてはV16で、現在の職業は弁護士、同じ弁護士の仕事をする日本人男性と結婚している。V16の特徴は、親世代がそもそもベトナム人コミュニティと距離をとり、日本人との関係を築いてきたという点であろう。

（親はベトナム人コミュニティと）ほとんど関わらなかったのですが、それは多分、ベトナム人は結構うわさ話が好きで、結構いろいろあることないことを言ったりするので、それがすごく嫌で、自分たちのことを話されるのも嫌だったから、一歩引いて…。日本人のほうと友人関係を築いていましたね。（2016年1月31日 インタビュー：V16）

このように親子間に断絶がなく「協和型文化変容」となる場合、親世代からの日本社会への適応の支援が可能となり、上昇移動の可能性が高まると推察される。ただし、「上昇移動」「下降移動」は、遠く離れた結果ではないと推察されるような事例もある。V11は親世代が日本社会での適応が極めて困難であったこともあり、自身は高校進学するも中退して風俗産業で稼ぎ、今の安定した生活を手に入れるまでにはかなり苦労したと話す。そのような彼女は、ベトナムやベトナム人に対して、「汚い」「働かないのかなとか、日中から何してんだらうとか、どうせあの人も（薬物）やってんだらうとか、そういう目でしか見てない」と話す。加えて、彼女が現在の日本人のパートナーと結婚し、安定した生活を手に入れると、彼女の両親はその生活を当てにするようにもなったという。それを毛嫌いすると、親たちは「親不孝者」というので、「でも、私、もともとあなたたちに育てられてないからね。あなたたちが育てたのは、あくまでも12、3歳までで、それ以降は国の力と自分でやっている。何一つやってもらっていない」と言い返したとも話す。このような様子からは、下降同化と上昇移動は、必ずしも正反対の結果ではなく、背中合わせの側面があることがうかがえる。

(2) 二国間志向型：トランスナショナルな社会空間の維持 (5名：V6・V7・V8・V9・V18)

第二は「二国間志向型」で、トランスナショナルな実践が日本とベトナムの両国にまたがって維持されており、それが家族のつながりを介して、愛着的に維持されているところに特徴がある。

前述したように、ベトナム系の親子間には「役割逆転」という関係が成立しているが、こうした状況を親世代は喜んでいるわけではない。そのため、もう一度自らのコントロールのもとに子世代を置くこと、あるいは、親子関係の再構築を目指して、子世代の結婚には「ベトナム人」を選択するように促す。本調査対象者19名のうち16人が、親世代から再三「結婚はベトナム人と」と言われたと話している。もちろん、こうした期待に対し、前項のホスト国志向型に分類された二世帯は、それを明確に拒否し、「日本人」(V11・V13)をパートナーとして選択したり、将来は「国籍にコンプレックスのない人」(V12)を希望したりしている。

しかし、こうした親の期待を受け入れ、親の親族による紹介で見合いをして結婚を決め、パートナーをベトナムから呼び寄せる者もいる。「お母さんのお友達の子どもの友達だったんですよ」と話すV9は、「会ったのは2回ぐらいで、あとはチャットとか、メールとかのやりとり」をして1年で結婚を決めたという。結婚の決め手は特になく、「成り行きって言うか」「お母さんも気に入っていたので、それが強かったかもしれないですね」と語る。

このようにパートナーをベトナムから呼び寄せることで導き出された、日本とベトナムの二国間にまたがるトランスナショナルな実践は、子世代の夫婦間での必然的営みとなり、愛着的に維持されていくことになる。例えば、母国訪問が頻繁になり、「1年に1回」(V6)、「旦那とつきあったときは毎年行っていただけ」「あれ(呼び寄せ)からは3年、4年に1回」(V8)などである。また、ベトナムからの呼び寄せではなく在日のベトナム人をパートナーとしたV7は、里帰りを楽しみにしており、次のように話す。

— 里帰りする場所は、どこに帰るの。

V7 彼はホーチミンだから、私はダナンだから、例えば2週間行くじゃないですか。1週間ダナン、

1週間ホーチミン。

— なるほど。結構楽しみ？

V7 子どもが、すごく楽しみにしている

— 行くとすると、いつ行くの。子どもが学校だったりするじゃない？

V7 それを休んで行く。

(2015年4月28日 インタビュー：V7)

また、「送金」も子世代独自に行っている者も2名おり、自身が「旦那のお父さん」(V8)に送っている場合もあれば、自身はしないものの「夫のほうで仕送りをしています」(V9)という場合もあった。

このようなベトナムからの「呼び寄せ」によるパートナー選択を果たしたものは、親世代との関係も密である。このパターンに分類される5名のうち3名は同居で、別居の2名も「お母さんが毎日来ます」(V6)「近いから、ほとんど毎日」(V7)と話し、家族のつながりが愛着的で、「役割逆転」の様子はもはやなく、世代間の断絶はないようにも見える。ただし、それは決して安定的なものとは言えない側面があることには注意が必要であろう。その一つは、世代間の断絶の解消は、子世代の努力によってのみ調達したものであり、子世代は、そこにある種の不満を感じているという点である。

ほかの家庭は私は分かんないけど、私の中では親が一番と思っているので、例えば、向こうだと親が子どもを病院に連れていくってというのが普通じゃないですか。日本だと、私は自分で行くし、親が病気をすると逆に連れていっているような、私がないと親は駄目みたいな感じになっている。

(2015年4月28日 インタビュー：V7)

ここで語られているのは、現在自分の子ども3人の面倒も見ているのに、親の面倒も自分の子どもと同じようにみないといけないという、その苦勞の語りである。したがって、V7は、母国訪問を大変楽しみにしており、「ベトナムならば、親は親でやれるから」と、親からの解放のうれしさを表現している。

他方、ベトナムからの呼び寄せによる結婚をしたV9は、その選択が自分にとってのベストでなかっ

たことを次のように語る。

ほんとは、一番いいのは在日ベトナム人です。やっぱり、自分と同じぐらい日本語もしゃべれて、自分も苦勞しなくてもいいじゃないですか。でも、そのとき、付き合いもあったんですけど、そこまではいかなかったから、こっち（お母さんのお友達の子どもの友達）に行ったのかなみたい。

（2015年5月30日 インタビュー：V9）

今回のインタビューに関する限り、このように語られる彼女たちの不満が大きく蓄積されているように見受けられなかったが、今後、子世代にかかる負担や不満がどのように処理されていくかを視野に入れた検討が必要になると思われる。

（3）多文化社会志向型：トランスナショナルな社会空間の構築（5名：V1、V5、V14、V15、V19）

第三は、親世代から受け継ぎ維持することのできなかったトランスナショナルな実践を、前述の「二国間志向型」のようなパートナー選択による愛着的な維持によるものではなく、子世代が育つ地域にあった多文化やエスニシティを肯定する資源を活用することで、トランスナショナルな社会空間をつくりだすものである。二国間志向型と近似しているものの、二国間志向が家族構造を基盤としているのに対し、多文化社会志向は、地域の多様なエスニシティを取り込む外国人ネットワークを基盤として、トランスナショナルな社会空間を第二世代独自に構築しているところに特徴がある。

かれらに特徴的なことは、いずれもある時期までは「ホスト国志向」のもとにあるが、ある時期から、ベトナム語の獲得、「ベトナム人」としてのアイデンティティの獲得、さらに、親に同行する母国訪問ではなく自らの資源の獲得としての母国への留学を実行していく様子が確認できることである。

ベトナム人ということが、今までマイナスにしか思っただけだったが、初めて、プラスなのかなと思えるようになって、そこからちょっとずつベトナム語を勉強した。（留学で）アメリカに居るときに、使える言語が、英語かベトナム語かなので、そこで語学力もちょっと伸びたし、ベトナム語もちょっと

頑張ろうかなっていうので、勉強して、日本に帰ってきてから、そういうふうな語学を生かせるような職場を探して、仕事を探して、外国人研修生を派遣するような会社があったので、そこに入って仕事をしつつ、勉強していったってのが一番大きいです。

（2016年1月31日 インタビュー：V14）

このように語るV14は、ベトナム人コミュニティがある神戸の長田地区（戸田2001）が出身地区であるため、ベトナム語を学習することが容易な環境にいたことに加えて、冒頭でも述べた「技能実習」ビザによる渡日ベトナム人の急増という社会的文脈が、彼女の仕事の獲得を後押ししている⁽⁷⁾。このような中で、第二世代固有のトランスナショナルな実践を構築しているのである。

また、V19は、神奈川県の一郷団地で活動する外国人当事者団体「すたんどばいみー」⁽⁸⁾で、小中学校では時々勉強やイベントに参加し、高校からはスタッフとして活動をしてきている。そのような彼女は「ベトナム人」としてのアイデンティティの獲得に、次のような過程があったと説明している。

V19 今はベトナム人。

ー 今はって言うことは、昔は。

V19 中・高校生のときは、名前だけ言うみたいな。そうしたら、みんな暗黙の了解で、日本人でしょみたいになるから。で、「ばいみー」に関わって、ばいみー一本書き始めてから、いろんな言い方をしてみてる。/今は、落ち着いて、「ベトナムにルーツがあります」って言うふうに言ってる。

ー ハーフだとか言ってた、あと、クオーターとかいう言い方してたときもあるよね。

V19 ある。でも、ばいみー一本書いてから、クオーターじゃないってことが分かって、そこからいろんなことを言うけど、あるとき、S（ばいみーの外国人スタッフ）に、「V19って自己紹介長いよね」って言われて。/「あ、違う言い方考えなきゃ」って思って、そこからいろんなこと試してみてる。

（2016年8月26日 インタビュー：V19）

このように、構築された「ベトナム人」としてのアイデンティティは、自らの子どもにも期待するものとして語られたりもする。V1は、地域の教会を拠点として活動しており、そこで知り合った日本人と結婚しているが、自身の子育てに次のようなビジョンを語る。

V1 まず、コミュニティですよ。コミュニティに連れていきますよね。自分、ハーフだよっていうのを、まず、わかってもらいたい。

— 嫌だって言うかもしれないだよ。

V1 嫌だって言われたら、俺、家でベトナム語を話すし。

— 絶対それはわかってくれる？

V1 わかってくれよと。まずは、おじいちゃん、日本語、あんまりしゃべれないから、ベトナム語なわけじゃないですか。難しいと思うんですけどね。僕も、正直、すごくしゃべれるわけじゃないから、ちっちゃい子の耳に聞き慣れるベトナム語をどこまでしゃべれるかわかんないですけど、おじいちゃんが少なくともベトナムなんで、そこは、まず、「おまえ、ハーフだよ」と。という認識をまず持っていてほしいなど。

— これはもう奥さんもOKに多分なるだろうと。

V1 うん。全然そこは。

(2014年4月12日 インタビュー：V1)

ここに見られるのは、トランスナショナルな実践が送金や親族訪問等の客観的行為として行われているというよりも、主観的態度として、出身国への愛着や帰属意識を、自ら創造的に生み出しているということである。この点は、エスピリトゥラ (Espiritu and Tran 2002) が「シンボリック・トランスナショナリズム」として、ベトナム系アメリカ人の母国に対する想像、母国での思い出の共有、母国の伝統を作り出すといった実践を概念化したことと近似していると言える。

さて、今回の調査対象において、このような構築的なトランスナショナルな実践を行う者たちに共通する経験として確認できたのは、日本での学校経験や学校に通っている時期の友達などとの関係が、極めて良好であり、自らのルーツが肯定的に受けとめられているということである。例えば、小学校時

代、「勉強以外は楽しかった」と話し成績も「下の下」と話すV5は、「Y先生は国際教室をやっていたんですよ。そこに国際の方は全員行っていたんですよ。／普通の授業の時間に別個で国際教室をやるんで、結構わかりやすいような勉強で、楽しかった。何でしょう。トークが楽しかったり」と、小中ともに先生には「よく面倒をみてもらった」と語る。かれは、定時制高校に進学、4年間通って卒業し、現在の職業に就き、今は中間管理職としてのポジションを任せられ、工具として働くベトナム人の面倒をみたりもするという。また、これまでに通称名を使ったことはなく、本名のまま仕事をし、帰化の予定もない。さらに、差別をされた経験も「全くない」と話す。今後は、現在つきあっている同じような経験をもつ在日ベトナム人との結婚を「30歳ぐらいまでにはしたい」と語り、順調な将来設計をもっている。また、先にあげた自身の子どもにも「ベトナム人」としてのアイデンティティを受け継いでほしいと語るV1は、「思い出深いのは全部中学校」「濃い3年間だったなと」「中学校の3年間がだいぶ濃かったおかげで、今でも、こうやって友達にも恵まれているし、かわりもあるのかなって気はする」と語っている。ここからは、日本の学校経験の良さと構築的なトランスナショナルな実践の関連が確認できよう。

(4) 葛藤型 (2名：V2・V10)

最後に、トランスナショナルな実践への葛藤が前面に押し出されていた2名について検討してみたい。V2は、現在は「ホスト国志向型」で、トランスナショナルな実践は消失傾向にある。また、専門学校卒業後に就職するも、1年ほどで仕事を変えており、インタビュー時26歳で、既に4回目の職場となっていた。また、親世代はエスニックレストランを経営し安定した生活を営んでいることと比較すると、下降移動の可能性が予想される事例であった。彼のインタビュー時の悩みは、現在つきあっている日本人の女性と結婚するか、それとも、ベトナムからの呼び寄せによる結婚をするかという点である。彼は、現段階で、つきあっている日本人の女性に「ベトナム人」であることを打ち明けられていないといい、他方、ベトナムからの呼び寄せには魅力を感じているようで、次のように話す。

お母さんの面倒を見たりとか、ベトナムの人ってすごく尽くすらしいんですよ。家事のことも全部やって、なおかつ、仕事にも行ったりとかしているから、頭では、俺も長男だしベトナムの人と結婚したほうがいいのかないかなというのはあります。

（2014年4月19日 インタビュー：V2）

ここに見られるのは、先に提示した「二国間志向型」のトランスナショナルな実践に向かうか、「ホスト国志向型」でいくのかという葛藤である。この葛藤が生じる背景には、転職回数に象徴されるように、彼の今の状況が、決して自己肯定感を高めるものたりえていないことにある。他方、彼が先に提示したトランスナショナルな実践を構築する「多文化社会型」に向かうことを制限している条件もある。それは、彼が日本の学校での強い疎外感を経験してきたことである。彼は、母親が旧日本兵の子どもであったことから、誕生時から日本国籍を取得しており、名前も日本名とベトナム名があったが、小学校入学時から日本名のみを使うようになっていったという。そのような中で、両親は一目見れば日本人でないことは容易にわかってしまうのに、「聞かれもしなかったし、言うタイミングもないし、言うことでもないから」と、ベトナムにルーツがあることを隠してきたという。「遠足とか、授業参観とかは、（親に）あんまり来てほしくなかったです」と語り、「（親がベトナム人であることを）高校になるまでは隠していました」と語るのである。

他方、V10は、V2と異なり「多文化社会志向型」に向かう可能性の中で葛藤状況にある。彼女の両親は、彼女が中学3年生の秋頃に薬物使用により刑罰を受けている。姉妹（V10、V11）は、両親の逮捕直後から児童相談所（児相）に送られ両親と離れて生活することを余儀なくされるわけであるが、姉妹の在籍していた中学校の担任らは、児相と協議を重ね、彼女たちの生活に積極的に関わっていく。たとえば、児相預かりの場合、学校も転校させられるのが一般的であるが、教師たちは、彼女たちが当時通学していたS中学校を継続することが、彼女たちの今後にとって重要であることを主張し、教師の送迎により児相からS中学校に通うような配慮を行っている。その後、彼女たちは、里親のもとで数年を過ごし、両親の出所後は親たちと生活することに

なったが、それは決して安定的ではなかったと話す。この時点で、妹であるV11は高校を中退し風俗産業で働くようになるが、姉のV10は高校で高成績を修め、推薦で大学に入学し、卒業時には保育士の資格をとって就職をしている。V10は「本当に先生の影響が大きいと思って。／中学の3年間は本当にいろいろあったけど、やっぱり中学が一番楽しかった」と話す。

こうした困難な状況にありつつも、彼女は「親と会話をするときはベトナム語だし、今の職場にベトナムの子がいるんです。そのお母さんに通訳をしたり」と、ベトナムにルーツがあることを隠すことなく積極的に活動をしている。しかし、パートナー選択にあたっては、次のような選択をしたと話す。

普通じゃない家庭、（うちは）そうだなっていうのは。でも、いろいろ経験したから今があるのかなって感じはするんです。やっぱ、自分がつらかった部分があるから、娘にはおんなじ思いはさせたくないから、だから、普通の人と結婚してみたいな、そういう人じゃない人と。だから、うちの親は日本人と結婚することをすごく反対していて、でも、私は、ベトナム人と結婚すると、ベトナムの人はみんなそういう人だって思っているから、「絶対嫌だ」って言って。

（2015年6月22日 インタビュー：V10）

こうした判断のもと、彼女は当時つきあっていた日本人と結婚することになる。しかし、そこからも彼女の新たな困難が始まることになる。

私は、ベトナムフェスとかにも行きたいんだけど、旦那は嫌だって。でも、行ったっていう。無理やり行くんです。

（2015年6月22日 インタビュー：V10）

また、夫がV10の親を訪問することに消極的であるために、それがけんかの原因にもなるという。しかし、それを繰り返す中で、今は次のように考えていると話す。

今まで負ってきたものがいろいろあるのを旦那も知っているから、あんまりいい顔をしない旦那の気

持ちも分かる。自分がもしそうだったらそうだろうなという思いもあるから。最初はいろいろ言っていたけど、最近はある程度責めたりもしないし、性格が分かっているから、別に無理に会わなくてもいいんじゃないみたいな。「葬式のときぐらいは出てね」という感じでいいかなと思っている。

(2015年6月22日 インタビュー：V10)

このように、インタビュー段階では、V10が妥協することで、トランスナショナルな実践は「ホスト国志向」に向かっていた。条件として整っていた「多文化社会志向」は、今のところは隠されており、今後のこの志向の行方に注目する必要がある。

6. 子世代のトランスナショナル実践に影響を及ぼす要因

これまで子世代のトランスナショナル実践を4つのパターンに分けて論じてきた。最後に、それらのパターンへの分岐を促す要因、それらのパターンと日本での社会移動との関連について考察を試みたい。

本論文の冒頭でも指摘したように、現在青年期を迎えているベトナム系ニューカマーの第二世代の最大の特徴は、親世代が「難民」として来日・定住し、そのもとで育ってきたという点である。特に、出身国であるベトナムの戦争後の混乱と、他方、日本の難民の受け入れが消極的という社会的文脈のもとで、親世代のトランスナショナルな実践はそもそも「模索」的に始まっており、その後、ベトナムのドイモイ政策を背景として「積極」的になるものの、ベトナムの経済成長によって送金等が必要なくなる中で「逡巡」するという傾向が確認できる。したがって、子世代のトランスナショナルな実践は、親世代のトランスナショナルな実践の逡巡期にあって、どのような継承が行われているのかという問いのもとで検討する必要がある。

先に述べたトランスナショナルな実践の4つのパターンから継承の可能性が示唆できたのは、「二国間志向型」と「多文化社会志向型」である。

「二国間志向型」での継承の規定要因は家族構造である。それは子世代のパートナー選択において、ベトナムの親族を介してベトナム人を選択し、日本

に呼び寄せることで、トランスナショナル実践が維持されるというものである。こうした実践は、親世代のトランスナショナルな実践の逡巡期にあって、親世代のそれを活発化させるという側面と、「役割逆転」のもとにある親子間の断絶を一定程度解消し、親子の地位関係を復活させる契機になっているという特徴をもつ。

他方、「多文化社会志向型」における継承の規定要因は、定住地域の多文化状況を容認する資源が、かれらの「ベトナム人」としてのアイデンティティを保証しているということである。この資源は、第1に、多くの外国人が住む地域であること、第2に、学校の教員や地域の外国人支援団体・当事者団体、あるいは、地域の教会によって、かれらのルーツを肯定する受け皿が準備されていること、という2つの条件を必要としている。これによって、子世代は、親世代からではなく、地域資源を利用して、かれら独自にトランスナショナルな実践を構築しているのである。こうした実践は、親世代のトランスナショナルな実践の逡巡期にあって、「二国間志向型」ほどに親世代のそれを活発にさせることにはなっていない。それよりは、親世代のトランスナショナルな実践と、子世代のトランスナショナルな実践とは異なっており、それが親子間の新たな葛藤となる場合もある。しかしながら、それ以上に、子世代独自のトランスナショナルな実践は、親子間に新たな紐帯を生み出しているとみる方が妥当であろう。この点は、稿をあらためて論じることとする。

最後に、蛇足的ではあるが、今後の研究の視角を提示するために、子世代のトランスナショナルな実践の4つのパターンと地位達成の関係について考察しておきたい。地位達成を考察する際に、ベトナム系に関して注意が必要となるのは、「難民」として来日したベトナムの親世代にとって、ベトナム出国の地点を起点とするならば、「難民」として第三国に定住し、「安心」「安全」の生活を手に入れたことそのことで成功していることになるということである(志水・清水2001)。この視角に立つと、ベトナム系第二世代は、すべて上昇移動となる。しかし、ここでは、その視角を採用せずに、日本に定住して生活に落ち着き始めた地点を親世代の起点とし、その地点との比較で、子世代の地位達成を検討してみたい。

この観点において、上昇移動と明確に関連していたのは、「多文化社会志向型」である。学歴も、高卒2名、短大卒2名、大学院在学1名と高く、就職しているものは、技術を身につけたり、資格を取ったりして、安定した生活が営めている。将来的には転職の希望もあるが、現状を維持しつつゆったりした生活を目指すか、さらなる上昇移動を狙うかの違いがあるものの、いずれにしても安定のもとでの転職希望である。

他方、下降移動との関連が明確になったのは「ホスト国志向型」の一部（本調査では男性2名）である。ポルテスら（Portes and Rumbaut 2001）によっても、アンダークラスに馴染んでいくことを「下降同化」と位置づけているが、それと同じパターンであると言えよう。ただし、本調査で独自に見いだされたのは、それが「対抗的」というよりも「疎外的」と呼ぶにふさわしい状況であった点である。

加えて、現状維持の傾向が見られたのは、「二国間志向型」である。ポルテスら（Portes and Rumbaut 2001）では、エスニック・コミュニティの存在は社会関係資本の獲得に大きな影響を及ぼしているとし、特に、経済的機会の拡大、家族構造の破綻の阻止、親の権威の強化が指摘されており、本調査の対象とも重なる。ただし、ポルテスらによれば、こうしたエスニック・コミュニティによる支援のネットワークは、親子間の「選択的文化変容」を支えるとされているが（p.64）、今回の調査段階では、その可能性は確認できなかった。このことは翻れば、ポルテスらの指摘する「選択的文化変容」を、日本社会に適応した場合には別のパターンがありうることを示唆するものでもある。この点は、稿を改めて論じることとする。

もちろん、今回提示した第二世代のトランスナショナル実践の類型はあくまで調査段階のものであり、今後変化し得る可能性は多分にある。実際、過去には「ホスト国志向型」であったが、その後「二国間志向型」に変化したという事例も数例見られた。かれらがライフコースの中でトランスナショナルな実践をどのように変化させていくのか、継続的に見ていく必要があるだろう。なお、今回の調査研究においては、職業選択の過渡期にあるニューカマー第二世代が比較的多かった。しかし、今後は職業経験を一定期間経たる者を対象にした研究を進めるととも

に、パートナー選択といったライフイベントを加えた継続的な調査を実施することでトランスナショナルな実践がどのように変化しうるのであるかを検討する必要があるだろう。

<注>

- (1) ここで「技能実習」の在留資格は、「1号イ」「1号ロ」「2号イ」「2号ロ」を合わせた名称、数値である。
- (2) 外務省、2016、「国内における難民の受け入れ」
- (3) 難民事業本部、2016、「インドシナ難民とは」
- (4) 難民事業本部、2016、「沿革」、なお、2006年には「難民事業本部」を除くすべての施設が閉所している。
- (5) 難民事業本部、2016、「日本の難民受け入れ」
- (6) 1998年～99年に報告者が参加したニューカマー研究会（代表、志水宏吉）のベトナム難民に対するインタビューでは、14家族中半数がベトナムへ母国訪問した経験（一番早い者で90年）を持っており、半数は「行きたい」という希望を話している（志水2000）。
- (7) こうした形での第二世代の仕事の獲得の社会的意味づけには留意が必要である。日本の研修生制度の問題は数多く報告されており（安田2010）、ベトナム人の研修生も同様の問題のもとにあると言える（博松2008）。
- (8) 清水・すたんどばいみー（2009）参照。

<参考文献>

- Espiritu, Y.L. and Tran, T., 2002, Vietnam, "My Country: Vietnamese Americans and Transnationalism," Peggy Levitt and Mary C. Waters eds. *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, New York: Russell Sage Foundation, 367-398.
- 外務省、2016、「国内における難民の受け入れ」（2016年9月11日取得、<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/nanmin/main3.html#section2>）
- Gordon, M. 1964, *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins*, New York: Oxford University Press.
- 博松佐一、2008、『トヨタの足元でーベトナム人研

- 修生・奪われた人権』風媒社。
- Levitt, P., 2002, "The Ties That Change: Relations to the Ancestral Home over the Life Cycle," pp.123-144 in *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*. edited by Levitt, P. and Waters, M.C. New York: Russell Sage Foundation.
- Levitt, P., 2009, "Roots and Routes: Understanding the Lives of the Second Generation Transnationally," *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 35 (7): 1225-1242.
- 難民事業本部, 2016, 「インドシナ難民とは」(2016年9月11日取得, <http://www.rhq.gr.jp/japanese/know/i-nanmin.htm>)
- 難民事業本部, 2016, 「沿革」(2016年9月11日取得, <http://www.rhq.gr.jp/japanese/profile/outline.htm>)
- 難民事業本部, 2016, 「日本の難民受け入れ」(2016年9月11日取得, <http://www.rhq.gr.jp/japanese/know/ukeire.htm>)
- 萩野剛史, 2013, 『「ベトナム難民」の「定住化」プロセス－「ベトナム難民」と「重要な他者」とのかかわりに焦点化して』明石書店。
- Portes, A. and Rumbaut, R. G., 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, Berkeley: Russell Sage Foundation.
- Rumbaut, R. G., 2002, "Severed or Sustained Attachments? Language, Identity, and Imagined Communities in the Post-Immigration Generation," Peggy Levitt and Mary C. Waters eds. *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, New York: Russell Sage Foundation, 43-95.
- 志水宏吉, 2000, 『ニューカマーの子どもたちへの教育支援に関する研究－家族への聴き取り調査から』平成11年度旭硝子財団・研究助成金報告書, 東京大学大学院教育学研究科。
- 志水宏吉・清水陸美, 2001, 『ニューカマーと学校教育－学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店。
- 清水陸美・チューブサラーン, 2015, 「ニューカマー二世世代の青年期－義務教育の経験と就職後の生活状況の関係に注目して」, 『日本女子大学 紀要 人間社会学部』第25号, pp.35-45.
- 清水陸美・すたんどばいみー, 2009, 『いちょう団地発!外国人の子ども達の挑戦』岩波書店。
- 田中信也, 1994, 「日本の難民受け入れ」加藤節・宮島喬編『難民』東京大学出版会, 141-68.
- 戸田佳子, 2001, 『日本のベトナム人コミュニティ－一世の時代、そして今』暁印書館。
- 安田浩一, 2010, 『ルポ 差別と貧困の外国人労働者』光文社新書。

<謝辞>

本論文は、日本教育社会学会第68回学会大会(2016年9月17日、名古屋大学)において、清水陸美・坪田光平・三浦綾希子による共同発表「ニューカマー二世世代のトランスナショナルな実践－ベトナム、中国、フィリピンと比較から－」の中から、ベトナム系ニューカマーの部分抽出して再構成したものである。共同研究者の坪田光平氏(職業能力開発総合大学校)、三浦綾希子氏(中京大学)には、深く感謝したい。

また、インタビューデータの取得に際しては、NPO法人神戸定住外国人支援センター(KFC)、NPO法人外国人支援ネットワーク「すたんどばいみー」の関係者にご協力いただいた。深く感謝したい。

<附記>

本研究は平成27年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「ニューカマー二世世代の義務教育卒業後のライフコースと次世代形成にかかわる総合的調査」(課題番号26285193研究代表者:角替弘規)による研究成果の一部である。

【調査対象者の

対象	性別	年齢	トランスナショナルな社会空間の方向性と実践の類型		生誕地	現国籍	滞日経緯	学歴	職業	使用可能言語
V3	男	23	遁滅	ホスト国志向型	ベトナム (6-7 歳来日)	ベトナム	難民(父)	高校中退	無職	日本語 ベトナム語△
V4	男	20	消失	ホスト国志向型	日本	日本 (誕生)	難民(親)	高(定時)卒	土木業	日本語
V11	女	29	消失	ホスト国志向型	日本	日本 (5年前)	難民(親)	高校中退	現夫の会社 事務	日本語
V12	女	24	遁滅	ホスト国志向型	日本	日本 (帰化)	難民(親)	大卒	アルバイト	日本語 ベトナム語△
V13	女	29	遁滅	ホスト国志向型	日本	日本 (帰化・ 結婚時)	難民(親)	高卒	DoCoMo (産休中)	日本語 ベトナム語△
V16	女	28	遁滅	ホスト国志向型	日本	日本 (帰化)	難民(親)	法科大学院	弁護士	日本語
V17	男	23	遁滅	ホスト国志向型	ベトナム (1歳来日)	ベトナム	難民(親)	大卒	無職	日本語 ベトナム語△
V6	男	29	維持	二国間志向型	ベトナム (10 歳来日)	ベトナム	難民(親)	中卒	中古品取扱 業	ベトナム語 日本語△
V7	女	32	維持	二国間志向型	ベトナム (13 歳来日)	永住	難民(親)	専門卒	パート (郵便局)	ベトナム語 日本語○
V8	女	30	維持	二国間志向型	ベトナム (14～15 歳 来日)	永住	難民(兄)	大卒	パート (通訳)	ベトナム語 日本語○
V9	女	31	維持	二国間志向型	ベトナム (11～12 歳 来日)	永住	難民(親)	大卒	パート (国際化 協会)	ベトナム語 日本語○
V18	男	23	維持	二国間志向型	ベトナム (10 歳来日)	ベトナム	日本人の 配偶者	高卒	製造業	日本語 ベトナム語△
V1	男	27	構築	多文化社会志向型	日本	日本 (帰化)	難民(親)	短大卒	製造業	日本語 ベトナム語△
V5	男	25	構築	多文化社会志向型	インドネシア (0 歳来日)	ベトナム	難民(親)	高(定時)卒	製造業	日本語
V14	女	33	構築	多文化社会志向型	日本	日本 (帰化・ 結婚時)	難民(親)	短大卒	通訳(外国 人研修生派 遣先)	日本語 ベトナム語○
V15	女	30	構築	多文化社会志向型	日本	日本 (帰化)	難民(親)	高卒	花屋	日本語 ベトナム語△
V19	女	24	構築	多文化社会志向型	日本	日本	難民(父) 旧日本兵の 子(母)	大学院 在学中	なし	日本語 ベトナム語○
V2	男	26	葛藤	葛藤	日本	日本 (誕生)	難民(親)	専門卒	建築業	日本語
V10	女	31	葛藤	葛藤	日本	日本 (定住→ 帰化 22 歳)	難民(親)	短大卒	保育士	日本語 ベトナム語○

プロフィール]

親学歴	父現職	母現職	母国親族との連絡	送金	母国訪問の頻度・態度		留学経験	パートナー選択	社会移動
不明	工場勤務	工場勤務	なし	なし	通減	断絶的	なし	考えられない	下降
不明	-(離婚)	無職 (病気療養)	なし	なし	通減	断絶的	なし	日本人	水平/上昇
父:なし 母:小途中	不定	不定	なし	なし	消失	断絶的	なし	既婚:日本人	上昇/下降
不明	不明	不明	なし	なし	なし	断絶的	なし	国籍にコンプレックスのない人	水平
不明	-(離婚)	不明	なし	なし	通減	断絶的	なし	既婚:日本人	水平/上昇
父:中学 母:高校	定年	退職	なし	なし	通減	断絶的	なし	既婚:日本人	上昇
父? 母:専門卒?	-(別居)	不明	なし	なし	維持(母親同行)	-	なし	(そろそろ結婚とは言われる)	下降
不明	-(離婚)	不定	頻繁 (妻経由)	なし	維持	愛着的	なし	既婚:ベトナム人	水平
不明	不明	不明	ほとんど しない	なし	維持	愛着的	なし	既婚:ベトナム人	水平
不明	-(同居)	-(同居)	頻繁	なし	維持	愛着的	なし	既婚:ベトナム人	水平
父:大学? 母:?	-(同居)	-(同居)	頻繁	なし	維持	愛着的	なし	既婚:ベトナム人	水平
実父:高校中退 継父:高卒、 母:中卒	-(死別)	-(同居)	なし	なし	維持	愛着的	なし	既婚:ベトナム人	水平/下降
不明	工場勤務	-(死別)	(教会)	なし	通減	構築的	なし	既婚:日本人	上昇
不明	不明	不明	なし	なし	通減	構築的	なし	在日ベトナム人	上昇
父母ともに 小卒程度?	不明	不明	なし	なし	通減	構築的	あり (アメリカ)	既婚:日本人	上昇
父母ともない?	不定	外国人支援 団体	なし	なし	維持	構築的	あり (3ヶ月)	在日朝鮮人	上昇
父:中卒 母:高卒	自営業 (レストラン)	自営業 (レストラン)	なし	なし	維持	構築的	あり(半年)	国籍のことをわかってくれる人	上昇
父:中卒 母:高卒	自営業 (レストラン)	自営業 (レストラン)	なし	なし	消失	断絶的	なし	日本人/ベトナム人	下降/水平
父:なし 母:小途中	不定	不定	頻繁	なし	維持	愛着的	なし	既婚:日本人	上昇

